

教務通信余話

まとまった話を書く暇がないので、バラバラに書き飛ばします。

私が、苫前小学校にきてから大変いいことだなあと思っていることがあります。

それは、

授業を公開することをいやがらない風潮

です。

私がきた頃からそうでした。

よく、「研究授業は普通の授業じゃないからやっても意味がない」とか「教室の雰囲気が変わるから、子どもが萎縮する」「授業は見せ物ではない」なんて言う人がいます。

こういう人に限って、普通の授業が素晴らしいことはほとんどありません。

また、こうしたもっともらしい理由に振り回されてはいけません。

公開しなくて一番楽なのは、実は教師なのです。

自分のスタイルという「粗悪な我流」を改善する必要性がなくなるからです。

私は、そうした教師が苦小にいないことを大変ありがたく思っています。

授業を公開する、教師の弱点を教えていただく、それを改善する。

さて、もっとも得をするのは誰でしょうか？

そうです、子どもたちなのです。

私は、子どもを適材適所に位置するという考え方に相当な違和感を覚えます。

例えば、「会長は がふさわしい」とか「委員長は に」などという考え方です。

私は、子どもたちに「君たちには無限の可能性がある」と教えてきましたし、それを実践すべく、やんちゃ坊主や元気のない子にこそ、「会長やらないか」とか「委員長やってみようよ」なんて声をかけました。

それは、いろいろ不備もあったでしょうが、その子たちは立派にやり遂げました。

もしクラスに指導の難しい子がいたら、大きな役割を与えて、小さな小さな進歩や成果を見逃さず、うんとうんとほめてあげましょう。

いえいえ、もし失敗してもうんとうんとほめてあげましょう。

要するに、子どもの問題は、「自分に自信が持てないこと」に起因していることが多いのです。

一方で、人間、1人でも自分のことを見方になってくれる人がいれば、なんとか持ち崩さずにやれるものです。学校でそういう役割を担えるのは、まず第一に担任教師なのです。

教務通信「世界の真ん中」 36

平成16年3月15日 教務係 山田洋一

たった一人でもその子の見方になってくれる人がいるか、いないか。

これはとても重要なことのように思います。

子どもは、様々な集団に属して生活をしますが、その中で1つの集団でも、いえ1つの集団の中のたった1人でもそういう人がいてくれれば、子どもは救われます。

ふつうは、家族がその役割を担います。

でも、そうでない子がいたら教師がしてあげたらいいのだと思います。

昔、学級がうまくいってなかったとき、ある子のおうちで不幸がありました。

私は、すぐに駆けつけて、なんて慰めていい言葉も見つからなくて、その子にあって「思い切り泣いていいんだぞ」と言ったのです。

そして、号泣する彼を抱きしめていました。

それで、その後、半年くらいして、いよいよ学級が難しくなりました。

私は、腹をくくって「先生に言いたいこと全部書け」と言って紙を配りました。

すると、一人以外全員が、好きなだけ私への抗議を書きました。

しかし、彼は「山田先生はいい先生だ。泣いていいって言ってくれたから」と書いてくれました。

子どもに救われた話です。

学級を荒れさせないためには、私は授業の質を上げることしかないと思います。

一日に、5時間も子どもの時間をもらってるわけです。

その5時間が、つまらなく、興味も持てず、力もつかなかったら、それは拷問です。

子どもにしてみれば荒れるのが当然です。

力があり、エネルギーがある子どもたちならなおさらその荒れ方はひどくなります。

では、授業の腕をあげるにはどうすればいいのでしょうか。

いろいろなことがあります。

第一に教師が素直に学ぶ。

まず自己否定が大切です。

自分はだめだということを認められるでしょうか。

第二に言い訳しない。

例えば、テストの点数が悪いときに、「どうしてこの子はできないんだろう」ではなくて、「この子をできるようにするにはどうすればいいのだろうか」と考えることができるでしょうか。

第三にひたすら子どもの事実に基づく。

どんなに、理論や理念がすばらしくとも、子どもをのばしていなければ意味がないのです。

また、どんな小さな伸びであっても子どもの変化を見逃さない目が必要です。

子どものことですぐに落ち込む人に限って、小さな子どもの変化が目に入っていないのです。

以上三つが心得です。

教務通信「世界の真ん中」 37

平成16年3月15日 教務係 山田洋一

さて前項で、授業の腕を上げる心得を書きました。

今度は実践編です。

第一に、教育雑誌を定期購読すること。

雑誌はあくまで定期購読することがいいのです。特集が気に入ったときだけ買うというのはあまりよい買い方とはいえません。買いそびれがどうしても起こるからです。

さらに欲を言えば定期購読は2冊以上（1冊は総合的なもの、もう1冊は自分の専門）しかも3年はとるとよいでしょう。

- ・教室ツーウェイ（明治図書）
- ・授業作りネットワーク（学事出版）
- ・教材開発（明治図書）
- ・社会科教育（明治図書）
- ・総合的学習を創る（明治図書）
- ・楽しい体育の授業（明治図書）
- ・心を育てる学級経営（明治図書）
- ・向山型算数教え方教室（明治図書）
- ・向山型国語教え方教室（明治図書）
- ・絶対評価の実践研究（明治図書）
- ・LDアンドADHD（明治図書）

このほかにも、授業に役立つようなミニコミ誌を3誌、ビジネス誌を2冊定期購読しています。

今自分で書いてびっくりしていますが、こんなに買ってたんですね。

で、読むかというとほとんど読みません。

目次だけでも、昔は読んでいましたが、今はほとんど読む余裕がありません。

それでも、買います。

なぜでしょうか？

例えば、私は、こんな事をします。

4月のはじめ。学級開きに関する特集記事が載った号をまず選び出します。

そして、片っ端から読みます。

さらに、気に入った記事をコピーして、1冊のノートに貼ります。

これが、宝であり武器になります。

私は、だいたい長いもので10年以上定期購読し続けているものがありますから、これはすごい武器になります。

研究授業するときにも同じ事をします。

福祉の授業なら、福祉に関係ある記事を1冊のノートに貼っていくのです。

第二によい授業をたくさん見ることです。

いくら本で読んでも、授業に関して言えば伝わるのは五パーセントです。

昔、ある授業実践（本）を読んで、その一〇分程度の授業を再現するというのをサークルでしたことがあります。

結果、全員の授業が大きく違っていました。

つまり、本というのは授業の情報を載せるのに実に不備な媒体なのです。

声のトーンは？大きさは？間は？表情は？速さは？すべてわかりません。

そういうわけで、CD。CDよりはビデオ。さらにビデオよりはライブということになります。